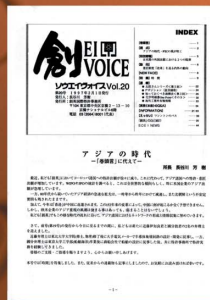
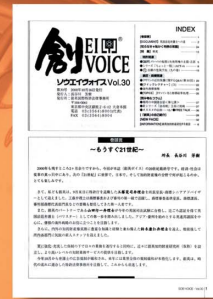


50号
記念特集

創英ヴォイスでたどる事務所の歩み



あの頃、君は...



各号に寄り添う引越先の思い出

豊島滋子

SOEI VOICEももう50号にもなったんですね。びっくりしています。

最初のこの号を手にとると岩本町の住所になっています。それから何回引っ越したでしょう！

今までにいた場所を振り返ってみました。

東神田 - ここは浅草橋の間屋街が近く、ウェッジウッドのレストラン専用のお皿やカップを販売している店とか、手芸用品が市価の4割引とかの間屋街がずらりとあったりしてちょっと面白い、昔ながらの町並みがありました。小売お断りの看板があったりして、普通と違う雰囲気もありました。

銀座のウィングビル - 始めて住所に銀座と付きました。でも銀座のはずれでした。

京橋のナショナルビル - 掃除の人の噂話によると最上階に松下幸之助氏の部屋があったとか。(個人的な感想ですが、ここの空調設備は今までの中で一番良かったと思います)

銀座の大倉本館ビル - 1階にいた大和銀行が撤退

した跡にあのカルティエがオープンしましたが、私たちがいる時期にはひたすら工事中で毎日通気口から舞い降りる真っ白い埃に悩まされた毎日でした。このビルの水洗トイレは日本で一番最初の水洗トイレだとか聞きましたが、確かに今風ではありませんでした。

そして今の銀座ファーストビルに落ち着いています。通りを隔てた所に京橋小学校があって、こんなところにも学校があるなんて・・・とびっくりでしたが、取り壊されて、マンションになってしまいました。また有楽町駅に向かう途中の桜通りは八重桜がとても綺麗ですが、葉桜の季節にほとりと毛虫が落ちてきたこともあります。

この場所は交通の便も良いし、もう引越は十分堪能したので動きたくないといそかに願っていますが、どうなることでしょうか？

それとも自社ビルが建設され、所員の望むすべてを兼ね備えたオフィスが出来れば理想的ですが...

20号 佐藤 英二

クイックレスポンスの思い出 ～創英ヴォイス第20号の頃～

創 英ヴォイスの第20号を読み返すと、1997年2月1日発行とある。その当時は、創英に意匠商標部門を創設して1年もたっていない頃だった。弁理士が私1人でスタッフ2名の小世帯だった。京橋ナショナルビルの第2サティアン(?)と呼ばれた部屋の片隅に意匠商標部門があった。創英に来て、銀座の伊東屋に文房具を買いだしに行き、両手に大きな袋を提げて帰ってきたら、「佐藤さん一体なにを買ったんですか」と当時のスタッフに言われたのを思い出す。その時買った回転式の名刺ホルダーは今でも私の机の上にある。創英はとにかく若いメンバーが多くて活気があった(それは今も変わらない)。

当時の意匠商標部門はまだヨチヨチ歩きの段階で仕事も少なく、営業活動に精を出していたころだった。創英ヴォイスの第20号に掲載された「意匠制度改革を巡る内外の動向」という私のレポートに、意匠の国際条約であるヘーグ協定の改正のための専門家会合がスイスのジュネーブで開催され、弁理士会の代表の一人として出席したとある。

ジュネーブ滞在2日目だったか、WIPO会議場からホテルに戻って机を見ると、数枚のファックスレターがきていた。ファックスには「急ぎの商標調査依頼がきました。東京へ電話してください。」とあり、次の1枚はその調査依頼書だった。「えー!急ぎの調査!?!」、調査依頼書を見ると、営業をかけている某大手企業の商標責任者の名前があった。「ありゃー、海外出張を

知らせたのに、なんで?」と一瞬息が詰まった。椅子に座ってファックスを読み返した時、営業活動の中で「創英の商標はユーザーフレンドリーとクイックレスポンス」を標榜していることが頭をかすめた。「これってトライアル?」「よっしゃ!」。

それからバタバタの作業が始まった。当時、特許庁電子図書館(IPDL)はまだなく、商標調査のデータベースはインターネット環境に対応していなかった。さっそく東京へ電話をして、当時のスタッフMさんとデータベース検索の打合せをし、その結果をファックスで送ってもらうことにした。時差があるので期限ギリギリの作業だったように思う。商標検索結果のリストや商標調査報告書をファックスで何回かやりとりした。ホテルのファックス料金は確か1枚当たり千円程度だったが、軽く百枚以上はファックスでやりとりしたと思う。ずいぶん高くついた商標調査だったが、私とMさんの協働作業で期限に間に合わせることができた。丸1日程度の作業だったと思う。依頼された商標責任者の方から御礼の電話が入ったという連絡を受けて、ほっとしたという記憶がある。

そのお客様からはその後継続して依頼を受けるようになり、顧問契約も結ばせて頂いた。トライアルは一応成功だったようである。20名を超える規模になっている現在の意匠商標部門では起こりえないし、今はインターネットで世界のどこからでも商標調査が可能になっている。この後すぐにMさんは弁理士になり、今ではベテラン弁理士の一人である。買い物袋を提げた私に驚きの声をあげたのも実はM(弁理士)さんだった。

事務所の 変遷と 特許上の 主な出来事

1986	1988	1988	1989	1990	1992	1994	1995	1996	1997	1999	2000	2000	2000	2000	2000
個人事務所として開業	「弁理士4名の計7名で出発」	1月創英国際特許事務所創立	12月9日「創英ヴォイス」創刊	12月オンライン出願開始	東神田UYビルに移転	11月銀座ウイングビルに移転	5月京橋ナショナルビルに移転	11月銀座ウイングビルに移転	11月銀座ウイングビルに移転	11月銀座ウイングビルに移転	11月銀座ウイングビルに移転	11月銀座ウイングビルに移転	11月銀座ウイングビルに移転	11月銀座ウイングビルに移転	11月銀座ウイングビルに移転

岩本町時代 → 東神田時代 → 銀座ウイングビル → 京橋時代 → 大倉本館ビル → …… → 現在

30号

工藤 莞司

30号から七年

小 生が入所した時（2000年10月）に発行された本誌が30号であった。以来七年が経過して、50号を迎えた。年間3回発行であるから、着実に続けられた。世に、3号雑誌という言葉があるように、この種刊物の継続発行の難しさを表している。特許事務所関係でも、創刊情報は良く聞かすその後10年以上も発行し続けている例は希と思う。是非継続は力としたい。担当者、特に裏方作業担当者のご苦勞と努力に敬意を表すべきであろう。

30号において自己紹介をしている。7年後の現状と比較してみたい。

当事務所の第一印象では、若い力で生き生きと前進しているのが目に見えるように記している。入所時よりは前進が緩くなったような気がする。当時は主として長年勤めたJPOとの比較であり、更に規模等が増し

た上に、自らも内部人間となった現在では、印象が違って来たのは当然であろう。

趣味・スポーツとしてハイキングは現在も同様である。入所直後に山歩き記録200号を達成し、歓送会と兼ねて旧同僚達と高尾山を歩いた。その後、膝の怪我や故障もあったが先月で460号である。JPO時代にはなかった小旅行記録を含めているからでもある。今年になって、飫肥や掛川、北京、松本を旅行した際、城跡等を訪ねた。500号を目指して週末を楽しみにしている。ゴルフは昨年で断念した。

余暇の過し方は、相変わらずで、ハイキングとその記録作成と、判決の整理である。記録には携帯から写真を取り込めるようになった。後者については、事務所全体のデータベース化をと欲張っていた。一時所内システムに搭載して検索可能な状態にして貰ったが、その後のフォローがなく、現在に至っている。最高裁や発明協会等のサービスの充実化もあって必要性は薄くなったが、リスト作りは継続している。

40号

創英の現在

40号発行の頃

今 回、創英ヴォイス50号発行を記念して創英ヴォイス40号発行当時の思い出を語る、ということで記事を寄稿させていただくことになりました。創英ヴォイス40号が発行されたのは今から約3年半前の2004年3月です。当時の所員数は約140名でしたが、今では約160名になりました。ですから、この3年半の間も所員数が約20名分増えたこととなります。とはいえ140名の所員を有する特許事務所、というのは既に大規模特許事務所でありまして、現在の事務所とその雰囲気や仕組みは大きくは変わらないと思います。そこで、創英ヴォイス40号発行時の事務所の思い出、ではなく、将来の思い出になるであろう現在の創英のあれやこれやをご紹介させていただきたいと思います。

創英ヴォイス40号発行時もそうですが、現在も創英では様々なイベントがあります。新年会に始まり、花見、納涼会、所員旅行、そして忘年会が主だったものです。これらのイベントのいくつかは、所員の中から選ばれた幹事が会場の選定から出欠席の面倒までみています。

私は現在某イベントの幹事に任命され、色々手配をしている最中です。トラブルはありますが、一緒に幹事をやっているメンバーに助けられ、ここまで何とか進めていくことができました。こうしてメンバーみんなで乗り越えた苦勞はきっと、創英ヴォイス50号発行時の思い出となると思います。

また、創英では現在オフィスで熱帯魚を飼っています。メインエントランスに海水魚の水槽を、技術担当者のフロアに淡水魚の水槽をそれぞれおいています。海水魚の世話については専門の業者の方をお願いしているのですが、淡水魚については創英の有志によって餌やりや水槽掃除が行われています。熱帯魚たちは、メンバーのたゆまぬ努力のおかげで今日も元気に水槽を泳ぎ回っています。我が家の熱帯魚で精一杯の私は、その有志メンバーには参加しておりませんが、彼らのおかげできっとこの熱帯魚の姿も創英ヴォイス50号発行時の思い出になるだろうな、と思います。

今年の夏には創英第2オフィスも開設されましたし、新人も続々と入所してきております。創英ヴォイス50号発行時の思い出はまだ増えそうです。



1994年銀座ウイングビル 最興：明細書執“筆”中の長谷川所長（休日出勤中）

むかしむかし

||||||| 長谷部 浩明

入所したとき、私を含め26名でした。内事務が8名で、私は特許技術者として入所しました。その頃は、事務所のメインが、東神田のU・Yビルの4階にあり、その広さは、現事務所の玄関ぐらいのスペースしかなかったように思えます。

当時は、入所試験というものがあるだけで、初めて創英に電話してから30分後に面接を受け、それから1時間後には、「じゃあ、いつから来る？」と・・・。

今ではとても考えられないことです。今、入所しようと思っても、到底、入所できないということは、自他共に（特に所長が）認めるところです。

面接の会話で記憶しているのは、口答試験として「FETとMOSを簡単に説明して」という質問と、「給料いくらにしようか？」との所長の問いに、「いくらでもいいです。全くの未経験なので、最初は月10万円で結構です」と答えたことぐらいです。

ちなみに、給与は、「そんなわけにはいかないよ」ということで、年齢相応の世間相場を頂きました。

それから1～2週間後の入所初日、忘れもしない1992年(平成4年)2月3日(月曜日)のことです。

当時も今も、毎月1回、月初に朝礼があります。そこで、同期入所した女性と新人の挨拶をした後、その場で「はい、かぶって」と、赤いお面を渡されました。そう、その日は、「節分」だったのです。「鬼は外」の掛け声とともに、豆が激しく（痛いなの！）降り注ぎ、私は、入所早々、事務所の玄関から外に逃げ出す羽目になったことを15年経った今も、よく覚えています。お面を渡して下さったYさんの名前も、一緒に鬼になって逃げたMさんのことも。

当時の事務所の様子で覚えているのは・・・

インターネットという言葉すら、まだ、世間に広がっていませんでしたが、特許庁への手続きがオンライン化になり、「ワードプロセッサ」で入力した

データを提出するのが主流となりつつある時代でした。創英も、東芝ルボを使い、ワープロ内蔵のプリンタ（インクリボン）で、シャカシャカと印刷していた時代です。現在のパソコン出願と異なり、オンライン端末が600万円、700万円していました。

その中で、ルボを使わずに手書きで明細書原稿を書き、出来上がった原稿を事務員にタイプ打ちさせる技術者が、たった一人いました。言わずと知れた長谷川所長です。今ではブログを毎日のようにせつせと更新しているとは、当時の所長しか知らない人では、想像もできないと思います。

当時の創英を思い出すと、古き良き時代であったように見え、感慨深いものがあります。しかし、今の創英も、当時と比べても相変わらず、というより、当時以上に和気あいあいとし、バイタリティに溢れているように感じます。

十年一昔と申しますが、創英とともに過ごした15年間には、個人的にも、沢山の人生経験を致しました。テニスに明け暮れ、結婚し、母を亡くし、そして、子供三人に恵まれました。創英に居たからこそ経験できたことも多々あります。

今、私がこの場に居ることができるのは、創英のお蔭であり、創英を支えて下さっているお客様のお蔭です。この場をお借りし、深く感謝申し上げます。

私個人も創英も、この場に留まることなく、さらに進歩・発展し続けたいと思っております。今後とも、よろしく願い申し上げます。

1993年シンガポールへの所員旅行
左から長谷川・長谷部



1992年上野公園でのお花見
左から長谷川・寺崎・山田